205103-001-9

特60-365

仮名文章娘節用　2，3編

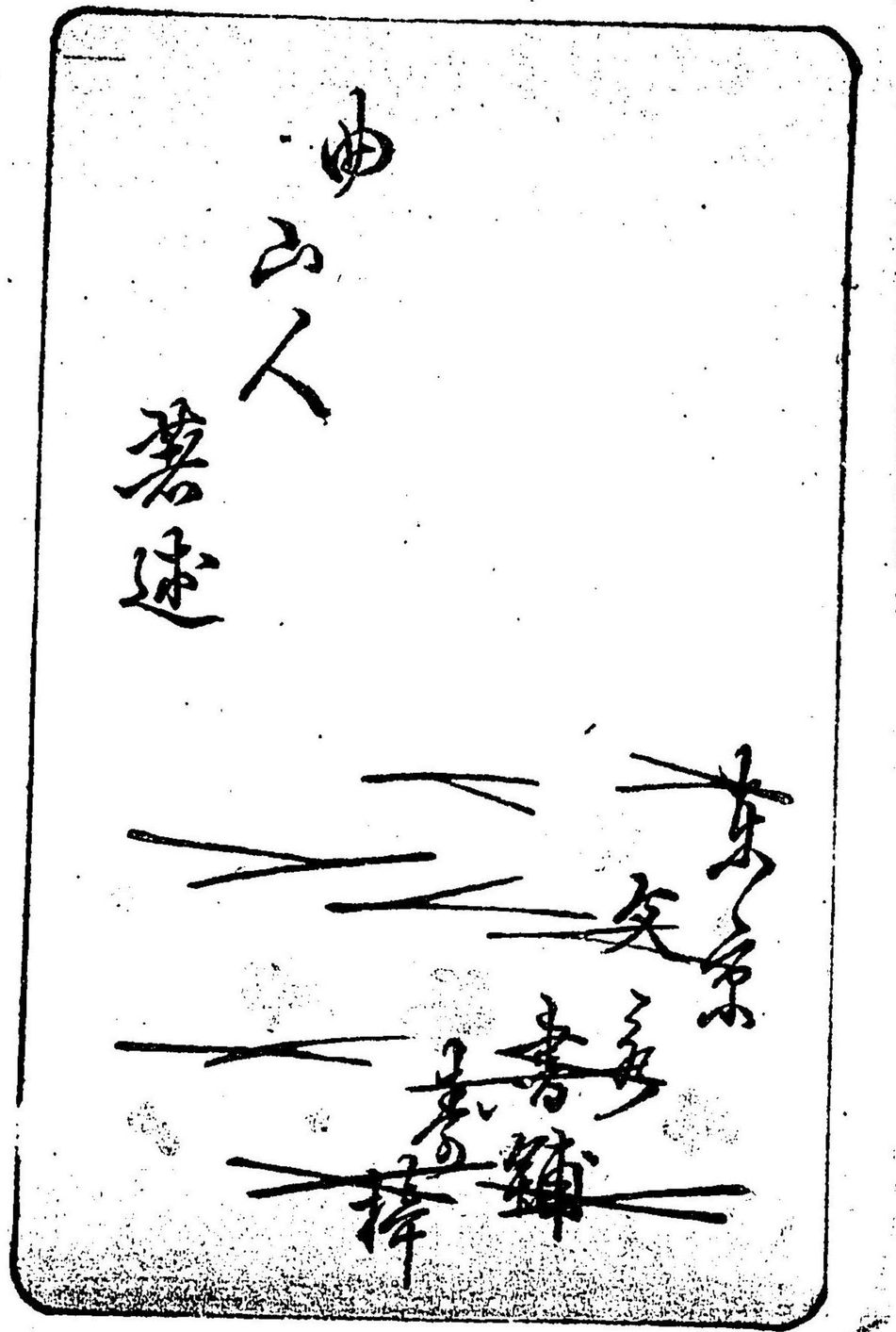
曲山人／著

M15

EDV-0106

60
特
365

ゆふ人 著述



娘節用二編叙

いろは引節用集は。日用の御重寶にて。士農工商が朝暮れ。引書。乾坤時候草木器財。何ぞも撰採十三門。部合に四聲れ書引入らず。和らかいのが。當世と思ひついたる假名まじり。娘節用とこじつけしを。俗でいゝとか實意だとか。茶かして稱る看

的の洒落と販元實とこゝろ。二編は今
些色氣澤山。戀といふ字は趣意を。穿〳〵
の平催促。初編は縁よひかさを。いやと
いはれぬ義理と憤鼻揮。書をぬもれは新
趣向。變らぬ口舌は魂胆もおもしろ狸の
腹合せ。帶の心實解尽せし。小三金五郎が
偕老はその約言のひそ〳〵と。枕に殘る仇

言は。おんなものでもふうかと書肆は
携せし稿本へ。ちよつびり加へた。補書の。
序に朱墨を摺ながーて。口繪の前をよご
すといふ

江戸　三文舎主人戯題

きん
金五郎

三さん
小ごと
泣よ
喚ぶ

假名家
文次郎娘於ゆき
金五郎一男金之助

假名文章娘節用後編上之巻

江戸　曲山人補綴

第四回

おゝに又。千歳屋の眞名鶴は。妹の小三よ名けりあひてより。
力になりつなられつして。いとむつまじく万の事をかたら
ひてくらせしが。かねてつき出しの時分より。さる有徳の商
賈の。隠居がふかくなじみさつ。何くとなく深節よ。よく
世話をなしたりしが。其ことしの暮眞名鶴いがの隠居よ受出
さき向じまの邊に樂々と世を送るこゝとなりにけるされど月

日の過と速にて明る二月のころには小さんはとや五ツ月となりしかな座敷へ出れば夜もふける又は無理なる酒も呑むゆゑ身のたゞよあしかるべーと金五郎は額俵屋れあるじにかけ合些の手付の金をつかはしちかきうちよは受出すほどよ夜の坐しきへ出さぬやうにとたのみよあるじ重兵衛もさすがは粋な男也名早速に承知して。いと深切よいたはりけりかくて金五郎は。小さんを身受の金とゝのへんと。さまざまよ思按したりし。がもとより大金の事なれば。蓑笠文次郎へ。うち明ていふべきやうもなかりしも名。いかよやせん

と左や右に。ひとり胸のみくるしめしゞ。やう〳〵に思按をめぐらして。京師の父文社巫かさへ。ひそかに言ひ送りけるは。おの三程條の小鍛冶宗近の銘作にて。大小のはらひものあり。殊に焼刃世にすぐをし。わざものよて其價は。一包との事なるがもとより。両刀は武士のたしなみ。何とぞ是を手に入たさまゝ。内々よて右の金子。御かし被下候やうにと。ひたすらに懇望の文面也名。文之亟もいとひそうなる。一人の子れ望あればいつはりなりとはつもしらじ。まとゝおもへばわが子ながらよき心がけ来たのもしく。本家を繼げど

も。兩親れあるゆゑ万事身まゝよもあらで。心にまかせぬがちさおそあらんと子をれもふ。なさけある親こゝろに。放なく百兩の金をとゝのへ爲替にてひそかに金五郎のかたへなくりけり偖も金五郎はげいなき去やの小さんが只ならぬ身となりしより猶さふに可愛さいやましはやくつとめをひかせんとれもへど身請の金とゝのはねど是非なくみやこの父のかたへ刀もとむる金ありとていつわりて書狀を送りしかどかの地て金とゝのふやそをさへ當よならざをばとよかくに心安からずみやこのたよりと待うちよーだい〳〵に月かさなてり小さんはそやこの月が臨月になりしかば額俵屋の重兵衛夫婦も深飾なる心から欲をはなれて小三をいたはり殊に金五郎れ親もとゞもたかなると云るもゑに手附の金を取しのみにて殘の金はうけ取ねどさらよゆやぶむとゝなく産の手當を何くをとのこるうたなくまめたちて安産をこそいのりける金五郎はかくまでも額重夫婦れ深切のひとかたならねをすおしもはやく身請の金をわたしたくれもへどそをも自由あらずひとり胸をそくるーめける。はや月みちて小さんれ。玉のやうなる男子を産ーかど金五郎はさらなり。額重

夫婦もよろこぶと大かたならず。その名を金の介と名付しが。両親よ似てうつくしけれだ。金五郎は日ごろよましして。小三金之助の愛にひかされき。とがくそは〳〵氣もおちつかず。内よるとは稀よしてて。顔重へのみ行ものから。白翁は惣領の。文之丞が不身持にて。大かたならぬ苦労をしつれだ。秘藏孫の金五郎。いたづらものになりもやせんかと。はら〳〵おもひねたりしに。ちかきころは外を内。内を外と居つかぬも。はじめのほどは若ものゝ。ならひとさのみとがめもせず。うち捨ておきけるに。漸々につのるもの。かくては身のためあしかるべしと。それもふてゐる日わか居間に。孫娘のお雪よ琴を彈せ。たばおくもらし聞るたるがきせるをはたいてしたが。お雪にむかひ「コリヤお雪よ。モウ琴もよいにしやれ。この頃は大ぶん上達が琴をきいて。大きにうさをはらしました。年がよるとおつなものので。外に何もさのしみがないから。れ念佛でもヤシとり。おのしが琴や三味線をきくのが。なによりよいなぐさみじや。イヤそれとさうど。アノ金五郎は内よゐるかのトといれておもきは琴のつめをとごーながらにこやかにハイお兄さんは。れ部屋にお出あそ

ばしまーた。なんぞ御用でござりますか白「ヲヽさしる用もあけれど。わしが今茶を入るから。ちとはなしよ來いと呼んで來やをもき「ハイ〳〵かーこまりました。お呼やてまねりませうト琴をかたよせ出て行く引ちがへて金「ヲヽ金五郎か。サア〳〵もつとこつちへ來て。茶が出來たから一ッ呑みやれ。茶菓子はさいはひ御前から戴頂もたのをとつてあるいつにかもらぬまめ〳〵しきよ金五郎も白「コレ金五郎。茶をのみつゝよもやまのはなしのついでおぬしも今が血氣のさかり。老人のいふといふもしろふわるまいが。ヲヽよふきゝやれ。おつなもので子とおもふ親の常で。貴い賤いの差別はないもの。さきだつていつの頃でかあつたか。上方から狀が來た時。あちふち一統風かとやるとさういふてよこしたもやつぱりおぬしを案じるもの。氣をつけてくれとの事であらう。もとよりおぬしもひとりの親。又兄弟とても外にはなし。もちろん文之丞はじめぬ去までも。かくしてはいるなをど。お龜とやらいふ容貌よき娘を。親去らずにもらふてそだてあげ。たがひに兄弟のやうにして。よくからぬ中であつたとやら。そのお龜でも側にゐたふ。又まされにもならうけれど。そをとても行がさしをす。

生死のほどもわからぬと。サ。ちらりとふりやさいたぞや。何をいふてもこちらのお雪は。まだ一向れ子どもなり。内よねてもおもしろくなるまいが。今では文之丞もおぬしをばこちらへもらひうけてからは。れ顧もねぬもへたのしみよ。おまふハコレそちばかりぢやからの。わるい耳をきかせぬやうに。せにやならぬが若いうちは。和發なものでも些づゝは身にあやまりの出來るもの。もうよもの〳〵の得手勝手もゐる。暑さ寒さも何とるおもふまいが。また内ではさうはない。アこの寒いに出てもきをつたが。風でもひきそへねをよいが夜がふけてかへらねば寐てゐてもろく〳〵ねらをず。人れ足音のするたびく〳〵に。歸つたか〳〵。門をし先たて這入らきぬのかと。引たて耳をしてきいてゐるぞや。ずいぶん折ふーた開ひなどで。なそびにもへくがよし。若いうちの事なをど。なんでもするなではないけをど。あのごろはおまりよおうじたぞや。そこがつのるとはてもていもウどうなつてもまゝの川と身のをさまりもつかぬやうに。なるものだからたまく〳〵は。の肉にねてみんなの氣もちつとはやすめるやうにしやと。このくらゐなとはいはずと

も承知してゐるでならうが。つれらぬやうにーたがよいト
かたいやうでもどこやらかぜのとをた異見に金五郎い一言
る丸ゐたまなでついとぢやわらかき
半句のかへすとばもなかりしが金一だん〳〵の御異見心根
よ微しまーてやし上るとばもござりません。こゝまで種々
に御苦労をかけまーたは。重々身のわやまり。おゆるしなさ
れてくださりましト　なやまりて入りたるをりからゆきーモシ
におもきはまさいてきたり
おゐよいさまへ。アノ上方から使がまいりましたト聞よ
り金五郎は俊かねたる。たよりにとびつつれしさゝ。しら
れしと胸をとかくし　金「ナヨ上がたかふ人が來たかへト

いふに白翁も「ヂヽなんぢや上がたから便りがあるか。今き、耳だても今とてうわさをした處。はやふ金五郎行て見やれトすゝむるに金五郎はいそ〳〵と玄關に立出。使ひに逢て狀け取。ひらきて見れば。刀をもとむる金一包は。使ひのもの持せつかはし候へと。ほらためてうけ取ヤベしと。こま〳〵といひ送りつ。猶其書狀の封ぢ目奥より隱居白翁への書簡も出ーかゞ。その狀は白翁れとまろへさし出し。かの一封の金とうけ取。おのゞ部屋に入りて返書をしたゝめ。使ひの者はかへしけり。金五郎はかの一封の金を得しかゞ。飛たつばかりによろこびて。すぐに懷中し。立出んとして申れ間を見れば。お雪はひとり一心よ。人形に着物を縫ふゐるすがたは。今年十四よなりけれと。よろづうちばにして。あどけなく容貌かたちもうつくしく心だてさへやさしけれど小さんにくらべてはをとるべー金一コウお雪ばう。それはあのあいだの人形にきせる着物かトとはをてゐもきもきゐるみをふくみ「ハイあなさにいたゞきましたゞきはいゝがの。れは今出て行から。ふぢいさんやおつかさんがお聞なすつたら。今仲間からよびに來てまゐりました

と。いゝ子だからさういつてくんなよト　いへばもきは「ハイ〳〵かしこまりました　金「なぜそんなに。わらふのだもき「それでもお仲間へ出ればそばは去たとヤまーてもおかへりがお遅ひとうそだと。お思ひねそばしませう　金「何さあとでは又どふでも。いひやうがあるかふいゝはな。案じずとさういゝなよもき「ハイさやうならおはやく。お歸りあそばしましトいふに金五郎は出てもく引ちがうだ「おやうへてれもきのうだはたちいでゝさんなにをねそだします　もき「これかへ。こきい此あいだおあよいさんに。いたゞいた人形の着物だよ　うば「もういゝかげんに〳〵さまいおりもあそばしまー。いつまでもそのやうに。最〳〵さまばかりかわいがつて。とふした物でございます。今に若旦那さまの奥さまに。おなりあそばすお年でからよもき「チャうばいいやなとそれいひだよ。ねれはおねにいさんだものを。そんなとはなりません。そう去てもうどこにか。奥さまがお出だよ　うば「それだからふねのやうに。お内よとては片時も。お出あそだす空いなく。それといふもおまへさまが。もうちつとをしとならしくあそばせよいに。はんのねゝさまで。若旦那の女ぐるひをあそばすと。ーらぬ顔で

れ出ねそばすから。わたくしはもうじれつたくつてなりませんよいはれておもきさ氣のどくそうに。顏をあかめて猶なほいもきさ「そをてもアノおぢにいさんいやみなさんに。まま事よおこゝろづかひをなそすから。おかわいさうだものと。ちつとは御保養せおあそびを。ほそばしてもよいではないかへうば「それは又もとの事。おなたはお家れお嬢さま。若旦那さまをお血すぢでも。御養子でござりますもの。お心づかひもあそばす筈をト。お主おもひの圓燒もちおもきはにこ〳〵ながら「ヲヤ〳〵そんな事をいふとしからるよ。上がたの伯父さんの。まおとのお宿は愛だから。おつかさんがさんよりお兄さんが。大切だとつねから。おつかさんがおつしやつたよト子供心にも金五郎を。大事にするぞいぢふしゝ。さても金五郎は。件の金をたづさへて。飛がごとく額俵屋へ至りて。小さんの身の代に逢て。小さんの兵衛に逢て。あるじ重兵衛に逢て。世話になりしを厚く報をゝわたして是までひとかたならず。世話になりしを厚く報ひ。夫よりたゞちに菅柳橋の。邊なる久米川といふ料理屋の裏に家をもとめ。造作までも奇麗よしてこの家に小さん金之助をひきとり。乳母をかゝへ婦女をたきて住はせけるに。

小さんいもゐなく。産後すらく〳〵肥立ものから。小さんはつくゞ〵行すゑを。考へ見れば金五郎も。養子の身にて。この身をはじめ。金之介や乳母下女まで。はぐゝまんと大ていなふす所詮わが身をおちぶれて。一旦廓れ藝者して。人よも顔を見られたれば。今さら娘してくらすとも。誰しらぬものもなければ。女の手わざよはかゞゝしき事も出來ねば。またもとのげいしやとなをだなれし事ゆへ。さのみよ氣ぼねをれぬわざ。三筋の糸の世わたりも。藝を身を助るとたとへのふしも金五郎がせめてはと心やすめなりと。思へば金五郎へ我胸を。うちあけてものがたれば。小さんをふさゝび客へ出さんは。人のわもはく世のそしりも。口をしくはれもへどゝも。万事心にまかせぬもゐ。詮方なくて承引ければ。小三は是より冨貴となりて。客の相手に出しかば。容貌もすぐれ座もちなれた。引手あまたにいよゝはやり。内に居る間はなかりけり頃しも霜月れすゑつかた。小さんは金の介をかきいだきその身もこたつへよこになり。出もせぬ乳とふくませて。ねんろゝと鼻うたを。うたふて寐かしつけてゐる。そのかたは

らよ乳母のおちゝは。火鉢に挿花をおしらへながら金の介の頭巾を縫つてゐるところへ金五郎は。しやうとこあけて入りきたるを。小さんは見てかはを「ヲヤ入らつしやいまーたろう　金五郎「さうよ。なんだかひどくひへるのふ。ぼうずめは又ひる寐かト　いながらはとりをぬぎすてて　互燵へあたりて寐ころべば。小さんはかた手にてたばこをすひつけ。金五郎にしながら　小三「もしおまへさんエ。なの廊かち最中のもらつたのがありますがアノお雪さんにあげまーてはわるふございますかへ　金「ナニわるくもねへが。なんな大きなものにやるよりは。取ておいて坊よやるがいゝ　小三「それでもおの子にはもあんまりおまくつて。わるふございます。ほんに廿梅もありましたから。一所よしておいておぢいさんけとこへでもあげませうか　金「ばかアいねへ。石部金吉鉄かふとといふかたい内へ花廊からもらつたものが出されるものかなトいはれて小三はこゝろづき「ヲホゝゝ。ほんにさうでありましたね。それはさうとアノおもさんは。さぞおうつくしくおなりなさいましたろうね　金「さうさ。まんざらではねへけれど。まだ一向のねゝさまなり。どこのか人とくらべては。とても及たね

へ論なしよト ゆびれさきで小さんれ顔をちよい 「又そんな
とつくに小さんはわらひながら
よくらしいとを。夫でもモウ女といふものい。子もちになる
と色氣もなくなり。つまらぬものてありますねへ。金「ちげへ
ねへ。色氣がなくつても汁氣があれば澤山だけふばゞアト
あるをかくれむ うだ「チホ〳〵ほんにさやうでございます。
うばもふきだし
わたくしのやうになつてはいけませんが。御新造さんなど
はこれからが肝心でございます小「チャいやよ。夫でもむつ
なもので。子供にかまけると。いくじなくおもふやうだよ。夫だから座ー
わが身ながら婆々ぁじみたとおもふやうむさくつて。

きへ出てもお客がみんなわたしの事を。子もち山姥だなん
のといふから。わたしも夫をやつぱり通して。斯いふ噂を聞
つてやるよ「わかい時は二度は子をもつてしる親の思はど
て。親に苦勞とかけるはばかよ。深いものはないわいな」「たとへ金銀で富士の山つむとも子
にや易られぬ。ほんに世の中に子ほどかわいいものはない」
と唄ふゆゑ。中にはむねきなお客い。てめへけやうなものゝ
やア。ろくな子を出來やアしめへ子といふものい屁をひつ
ても。できるのなんのとぢらす人があるから。わたしも又ま

けぬ氣で。味噌をあげるじやアないけどさ。かわいゝ人と大ばねを折て。おーらゝゝ子だからね。ほんとに田舍の子とは。ちつとちがひますといひますから。色氣がなくつていゝといつての呼んでくださるからおかわいのサ 金「ハンとんだかふくりのいひ立だ。ほんとおのごろおやア。めつさう口が達者になつたよ。道理でおれもいひまくらされるはずだ。いつゝぬてゐる金のつまむゆへ金の介抱顔を 小三「アレまたそんないたらづたしかめながら目を覺すつかりとうくおこしてしまいおすつかせつかくよく寐かおつけましたものを金いゝわな。わんまりひるねをするとよ夜るになつて目をさますから。やかましくつてねられねへ 小三「それまへさんではないまい去 金「ナゼくく 小三「なぜもよくできまえた。なんたはいつでもひるまでづゝおようてはお起なすつて宵ッぱりをなさるものを金「なんの。むりよおこしてそも。もう朝おきの時分だから。アレ機げんのいゝ事を見お。れをが顔を見ちやアよこくわらふぜ。いゝ子かくいゝ坊ちやんだゾト金の助の顔をなでてありや。れつかアれやうに。うわ氣よなつちやアいかねへぞ 小三「チャけーからねへ。わたしなんなたよ似らの親に世話だかりやかせませ

うトいひながらたいとこお竹や何をしてゐるか。坊が起さろのうたをむねてからちつとたいておくをよ　下女「ハイ〳〵サア〳〵おぼうさんお出でなさいましアノお乳母どん。わたしやア今ればぼうさんをつれて恵近院へ行てあそばせ申すからう。アノ歯入やが来たらながしの下駄の歯と入さ仕て。れくんなさいようば「アイ〳〵。それはいゝが。お泣をすつさふはやくお帰りよ。お悋我をさせ申さねへやうにおしよ　下女「アノそんなふ行てまゐりませうト髪ゆひあふひがみのおさばか来るを見　小三「チヤおたぼさん。丁度よい間だよサアれあがり。

坊を今あそびに出去さからこの間にちよつと結ておくれなたぼ「それは丁度よふござゐますね。チヤ旦那れ出なさいまし去。この間は間ちがいましてさつばりお目にがゝりません金「ほんにさうサ。なんだう急にさむくなつたね。モウこんなこたつと首つひきを。するやうになつちやアいけねへのサたぼ「チヤおまへさん。そんなとをおつしやるが。こさつといふもれは能もれで。ちよんの間の楽ーみがありますよねへ小三さん小三「なんだねれたぼさん。おつな事とおいひでない。人の鼻をこするやうな。わたしらアそんなとはきらひ

サ金「コウれたぽさん。れまへもよつぽど好物家だね。なるほどちよつといちやつくよは。まんざらわるくねへやつさ。冬の色事はこたつで出來るやつが。いくらもあるものさ　小三「もーおかしくもないそんナともなしは。もうおよしなさい氣障で有ますはね。サアれたぽさん。今よ煮花ができるから。其内結てれくれなねへトこれよりおさぼは小三　たぽー「小三のかみをもひながらさんきさのふは、アノどこへお出なすつたへ　小三「きのふかへきのふは舟で酉れ町へ行たはねへ。夫だからいつもより髪がだいなしにあつたのサ　金「ナニきのふは舟へ行たから髪がこはれたと。そいつもちとあやしいたぽー「ヲヤ〳〵日那が何かおつしやるよ小三「又れやきがはじまりさ。先づらーくでざいません金「これがやけねへでどうするものか。番人のねへ生眞だもの。どんな人が釣かしれやアしねへ小三「ヲヤとんだ。寃を受るもんだよとへどんな釣人があつて。餌魚とどん〳〵まけばとて。曲つた針にやアかゝりませんよ。はゝかりながらわたくしは金「へンとんだ所でりきむやつよ。あかゑが芝居とするやうにトからかつてゐるうち　小三「でアやアお茶とまだ出來ぬかへ　うそだ「ハイやう〳〵できました

小三「そんなふ一ッ拵げやうト金五郎のはつおとりてたぼ「是はとゞかりさまモウ松かまいなさいますな。ほんよ日那へ此ごろに顔見せいどうてござります　金「わたしも此間からさういつてゐるのサ。小三も見てへといふから一所にお出な。四五日のうちにたぼ一夫とありがたふございます。樂しみよいたしておりますよトいふところへくめ川の「モシ小三さんへ。このぢうのおわかいもの入り來りけて。留てくをろといつてめへりましたよ小三「チヤさうかへ。げふはお店の衆のやくそくも有が。こつちは夜が更るからとはつて。おまへのほうへ參らうよわかい者「そんならのちほど御案内をいたしませうトわかいものはたぼ一どれわたくしもゐりませう。さやうなら小三さん。又明日トあいさつ去て。髪もひれたぼいかへりけり

假名文章娘節用後編上之卷終

假名文章娘節用後編中之巻

江戸 曲山人補綴

第五回

小三は久米川より口がかゝりしもの。鏡臺取出し身じまひせ。紅粉おきろいもふかくはせず。ちよつと化粧て愛弁前ざし一本うーろへい。銀の細うちばかりさして。いきなつくりのいやみなし。金五郎は手枕ーて。こたつにあたりねいりし様子に。小さんい戸棚よりかいまき出しそつとかけて枕をなてがひ。そこらかたづけ金五郎の羽折をたゝんで戸棚

へしまひ。火鉢のそばへすわり。ただこと一ぷくのみ。そこにある浄るり本を手にとりなげ。よみながら乳母とをなし小三「コウばアやよ。おんなといつたらまた。つまらぬ事とわふだらうがの。水のながきと人の行するほど。定めないものはないよ。此浄るり本の三勝を見るやうなわたしの身のうへ。よく似てゐるがもしひよつと浮世の義理にからめられ。どんなわかまにならふもしれず。アさうなつたらどうしやうと。外に苦労はないけれど。ことばつかりが案じられて。人の知ぬ胸をいためるよト　身の行すゑをくりかへしはろりとおとす

一トしづくうばはうばそむかふ打けしてもたゝぬ事を。おつーやるものではござりません。その三勝の身のうへは。それはほんの戯作もの。今どき繰廻だれなんのかのと。芝居かーやれ本ではあるまいし。どふしてそんなことがありますものか。さわいもない事ばつかりト　いひまぎらせど共なみだ小さんもむねを衝でれろ云　「ほんよさういへばそんな物作物とはしりつゝも身につまされて繰言いふもやつぱり女のあさはかゆゑ。金坊といふ子までゐるものを。御本妻よいなられずとも末のすゑまで添とげやうと思はないであんとせう。もし

もれ事があつたらば。夫は又その時のともう〳〵案しまいくはなしなかばへ久米川よりむかひの人がきたるよぞ小三一そんならばアやアを行て來るから氣をつけておくれよト出かゝり玄がはんにアノ坊が。歸つてわたしが居なかつたら。又おとゝさんをいびるだらうから。アノはいらやうにうづく燒がわるいから。ゐをやつてだまーておくれ。わさしが又かへりになんぞお土産を買て來るからそして其日暮がさめたら。大かたお茶漬をよばれうから。鍋燒でも取てなげておくれト万事に氣くばりぬけ目なき女房かたきぞ斯まで夫やわが子をも大事にかける心から。

座しきへ出てもとにかくよ。内の事のみ案じらるゝ也。勤といふ字ハ是非なくもいやな客よりも機げんとる。心の中ぞつらから先。かくて小さん金五郎は。たゞ金の助の愛におぼき。他事なく暮すそれ年も。くれて又來る春がすみ。たなびく空もうらゝかな彌生なかばれ事なるが。金五郎と仲間の者よさそはれて。向ふが岡の花見もどりのほろ醉に。みあゝ〳〵坊にうちのりて。青柳橋まで來りしが。こゝより上りて金五郎は。八々にわかれて可助といふ。供の男を引つれて。衆川の前へ來るを。乳母は金之助をいだきつゝ。かくと見るより遠

くからうば「チャ〳〵これぼうさん。アレおとつさんらつしやいましたよ金五郎「チヽ坊かだアよ。だつこーていゝのふ。おつかアの内にかへらうば「ハイお宿でございますサアれぼうさん。おとつさんにおじぎはへ。イ汽機げんよふとチホヽヽ。イエ〳〵おとつさんにだつこはなりません。もうまつくになりますから。これ寐んねがよふございます　金五郎「金ぼうやおとつさんはねつかさんのとこへ行てれ乳をのむよ。なばゝ〳〵だよトいふに金ぼう介はかほを見ておとつ。ちやん。いや〳〵おつか。ちやんとちゝいやゝ〳〵うば「チヽさやう〳〵おつかさんれお乳いお坊さんのんねへ。おとつさんは御ざげんもゐふじらしなすつていけません　金五郎「ハヽヽヽ坊やればかやゝトかふかひながら内へもき見れは小さんは今座敷よりかへりしまヽ三味線箇によりかゝり。物思はしげなる顔つきに金五郎はそ　小さんどうぞしたれか。おつな顔をしてゐるのふトいはれてにつこ　小三いゝへどりわふひながらうもいたしませんが今座しきからかへりましたのサそしてあなたは。どこれお歸でございますへ　金ナニおれか。拙者めは今日仲間の者の付あひにて。よんどころなく向ふ嶋へ。

御遊覧と出かけて鯛七へおしかけた處が。女子どもが大勢出て。ソレ手をとれ足を取と。ぐつたむせうにそやしたて。それからなんでも大ざかもり。さいつおさへつ唄へや弾やうたゝぢれて迷ふて。まよふてだれて。くぜつも千話も屏風の外へはふり出したる一ツ夜着」はやしさつさむせ〳〵堀までつける。あとの野となれ山となを。床とつたふねてかへれ雨ふつたら居つゞけだ。などゝうたふからたまらぬて小三「道理だぞやアきつい御機げん。それはさうと。あなたの京をぼう立の時。れとつさんのおつしやつた事を。覚へて御出なそでしますかへ金「これは又あらたまつさおたづね。親父のおしへを守ればおそ。外の女に目もふれず。たつた一人と守つてゐるから。何もとやかく案じなさることはござなく候サ小三「ヲホ〳〵。そのおぼしめしならうをしいけをど。今では日かげのこの身もゐる。おだいさんや皆さんが。このやうなとゝは御存じなく。只あなたがかまゝで。放蕩をなそばす事と。おぼし兒すでござりまうから。お宿れお首尾がお大事もゐる。なんまり御酒を飲がりますと。あなたのお爲になりますまいかと。それが苦労でなりません。思ひにあまるゐ心んみのいけん

よにくしとれもはねど。一盃さげんれ金五郎「ア、百も承知
一百もがつてん。お爲こかしのその異見聞たくもぬへ耳が
けがれる。酒をなんまりあかりますと。ゐなさのお爲になり
ますまいッ。へン酒を呑ふがれむ先へが。おれが口だから勝
手だによおはきにれ世話お茶でもゐがれッ。そんな利くつ
らしい異見をいふのは。大かた外よおつりきな。おもしれへ
はなしでも有からだらう　小三「ヲヤ久しいもんでありますよ金「ナニ久しいなじみがゐると。そをだからなんのかのといつて。はやく歸さうと思ふのだな。よ去〳〵そんなに邪广になるなら歸つてやらうとゐれるかん去やくはいふきへきせるとん〳〵八ッあたりに小三いつもれ事とおもへばわざとそしふぬかはをーてもなさい。たま〳〵はおはやくれかへりなさるも。御孝行でござりませう。ヲヤなんだか風が變つたやうだ。ア、雨がふらねばよいグト。さからはぬゆへ金五郎はきせるをしまひたちあがり金「ナニ御孝行でござりませう。お香々でお茶づけがさいてあきまらア。雨が降ふが降るめへが。歸るよ四も五も入るものかト むりなくぜつ我儘氣まゝをいひちら去。ぢれつゝ内へかへりけり。乳母はおの時金之助を連て歸りかゝをど金

五郎が不機げんの色に。次の間にてゐさせて居こりしが。
やう〳〵こなたへ出來り。うぢ一御新造さまへ。今日はおとつ
さまの御機げんが。ふわるふござりましたねへ。何のお腹だ
ちでなのやうに。お發りなすつたけでございますへト いへど小
さんはわら「ナニサいつでもわゝだはな。御酒をあがるとな
んだの彼だのと。わたしよ無理ぢつかりれつしやるのサ。た
まにはとやくお歸し申さないと。あなたもいろ〳〵譯ある
お身ゆゑ。わやどの御首尾が大事だからさ。れ内ではこゝろづか
ひもなさるだらうそ。わたしよまわがまゝのゐ人どおろだ

とお思ひなすつて。いつても〳〵なれ通り。それ丈此ころでは日よりして。だん〳〵御酒が上るから。まことに苦労でならなひよ。わたしは。何もいはれても。ねつから御気性を知つてゐるゆゑ。御酒をあがつて御きげんの時は。その気でゐるからよいけれど。やつぱりおもさんにもあの通りに。無理づつかりおつしやるかと。影ながらそバが案じられるよ。わたしも女の情だもの。いとしと思ふお方をで。つをなくいひてた歸しやすも。浮世の義理や二ッには。お身のためをおもふゆゑ心にもない事などをいひ出すまでの胸のせつなさ。すいりやうしてト　なみだぐむうなもさこそうむ一御尤でござります。譬にもいふ通り。一ッかなへば又二ッと。何をいふてもまかせぬうき世。十分な事はござりませぬもの。いろいろ御苦労ゆゑそばすも。因念とやらでござりませうト　しめりがちなるさなしなかばへくめ川　テイお竹殿ちよつと爰へ来ておけれりやうりばん表より　くんな下女「アイ〳〵佐介どんかへト　しやうじをあけきば佐介はひろぶさへいろ〳〵酒のさかなを一モシ口那はどうなさいましたよ　山三　ヲヤのせもちまみて　佐介どん一那はもうたかへりだよ　佐介一ホイそいつはおはしくじり。けふはなぜはやくおかへんなすつたヲ。さつきお

出なすつたのお見とゞけさから。せつかくゆん十めんして
旦那のお好な一ト口もの。仕こんでもらつてめへつたのに
小三「ヲヤさうかへ。それとマアよくいそがしいのに。氣を
つけておくをだ。うれしいぢ佐「なんにしても旦那が。お出
なさらねへぢやアはじまらねへ。そんならこの鉢のものや
何かい旦那へれこゝろざしだから。置てめへりませうト さか
なを置ていさても金五郎は。酒がいわする癖癪の。腹立まぎ
れとがもなき小さんよつらくあたりちらしてかへりしが根
もあきくぜつのことなをど又ははねど氣になるゆゑ。四五
日たちて訪ずぐるころ、小三のもとへいたりしに。小三は留
守にて乳母ばかり。針仕事をして「ヲヤ若旦那さま。此ごろ
はまとに〳〵れ遠〳〵しうござります 金五郎「さうサ。此間
はちつと用が多くつて。さつぱり出らをねへやつようだ「ア
ノあなたがいつそあのほうのあいだ。お腹をお立なそだーて。おか
へりなすつたかふ御新造さまが。まあとにれ案じなすつて
れ出なさります 金「ハゝゝさうだつたかれ。おをいさつぱり
しらなんだ。アノ今日りどこへ行たかうば「ハイ今日は鮫
清よ。なんとやらの會がござりまして 金「フウ坊りどうした

うば「お坊さんは今お竹がどこへかおつをやてまゐりました金一さうか。おれもわすれいしねへかのふうば「ヲヤとんだ事をおつしやいましな。三日や四日お出なさらぬとておわすれなさるものでございませうか今朝なともいつそおとつちやん〳〵と。あなたの事をおつしやいました金「ハヽア。子どもといふものはどふもにくいねへものだの。アノおれ間來たときちつとあたまへふきでがしたやうだつけがそんなにふゐもしねへかへうば「ハイれ頭のでございますかへ。そのやうにふゐもなさりませんそをはさうと若旦那さまへ。こんな事は申すまでもございませんが。御新造さまが明も暮ても。あなたの事のみお案じなすつて。それは〳〵御苦勞のやすまる間とてはございませんから。その御心根をおもひやつて。あなたもどふぞあんまりお氣を。れもませなそむさぬやうになすつてくださりまし金一イヤモウおれとても。にくしとおもふ小三ではなし。殊に子まで出來たのよ。すまはおれの手だすけと。いやな座しきの勤をするのは。なみ大ていの女などはなか〳〵及ばぬ心だてとおもへば。一日片時もつとめをさせる氣はねへが。足はぬがちゆゑ是

非もなく。苦労をさせるが可愛さうだト　ほろりとむとす男
にけ折から粂川のわかひもの清介。料理ぜん佐助　うちつを
り「ヘイ旦那このないだは金一ヂイ清助よ佐助公か。さアお
てがんぬへ　両人「ヘイ御めんなせヘト　ふたりながら清一もし
旦那此間はねかふ入らつしやいませんね。きついお見かぎ
だなのあいだ
り。又外に何かおもしろいせ世界でもでき出来ましたか　金一とん
だ事をいふおもーろい世界どころか。いつもまじめでさへ
ねへやつよ。ちつとおもしろい世界へ。案内してもらいてへ
のふ清一是はまた気いわく千万。ハヽヽ佐「旦那この間子。伽

なたがお出なすつたのを見とゞけまして。ちよつぴり廻向
しためへりまーして。もうあとは松祭りて。大きに鼻をおき
ましたのさ　金一ハ、アさうだつたかそいつア残念だつけの。
去かしその心意気はありがてへそんなら今からはじめやう
ト是よりいろ〳〵大酒もりとなるまゝにだがひにさいつお
着をとりよせ
さへつして。いとにぎやしくなりにけり　金五郎はとの間
て一り金一なんと清公や佐助公なんぞは。いつも〳〵いそが
しいから。女の所へ行ひまはるめへのふ清一サア。そこが
もしおつなものて。思でもずいぶん女も名にやア。相應に悪

斗もいたしますのサ、まづ女に逢はふといふ晩よやア。内ぢ
都合ーてはやくきりあげ。おたれたーなみの勘定をゝ引かけゝ
親かたの旦をしのびにいこそ〳〵とはけがけの。遣足出ーて
阿多氣へおしかけゝろし四ッ限も日よかけず。たゝきされこし
て上りの天料。サアそきからがが口舌のこんさん。おもーろ裡
の腹づゝみトのりだてはなずそのとおろへ座敷をしまひ歸り來る。小さ
んれあをより。箱まは去の仁介三張せん箱を香良ちやうち
んとかた手よ引さげ供をーて來る小三は上へあ「仁介どん
大きに御苦勞。こんなら明日來ておくきト かりながらおびにはさみし
金を出し紙にち

よいとひねつて「サアはゝで一ッ呑てれ寐よトおたせば御さはは仁介しはゝいたゝきて「へイおれは有かたふでございます。さやうなら明日。へイれやすみなさいましト三味せんおをれきそばへすわり小三「ヲヤよくお出なすつてくださいました。此間とあぜさつぱり。おいでなさいませんへトかはを見てよわふ「ンあんさりよくもうれしさうら來ずに居れば。又ちらむのかあされるのふ。四五日れれ來なかつたから。うるさくなくつてよかつたら。ほんまに邪广にされるから。晩によあすなでふつゝりとも。來めへし

れもつてわきらめてゐたが。逢ずよ行ではぢやアなくつて逢ずよゐると氣になるから。顏が見たさよついうか〳〵。つぱり迷つて又こゝ、小三「ヲヤばかふーいなんでありやすへ。滑どんや佐介とんが聞てゐるのよそんな事を金「ハテ人が聞ても大事ないてゝ。コウ小三こんな馬鹿よやア誰がしたらう。おれも生れつき是ほどの。阿房ではなかつたけのふ佐介公。楊貴妃や玉もの前のためしもあるから。さのみはづかしいとも思はぬへの佐介「こりやア旦那のが御尤だ。總てもりきむのはやぼのいたりサ。小三さんはやつぱりおばゝ、やつぱりでかされるは。おれが一生れわやまりだ小三「ヲヤよろしくやてれくんなさい。あなたそわたしとお化「なすつたのでございます金「そりやアまたなぜだ小三「それでも顯にもうたふ「り。心がらとて古郷をはなを。しらぬ此地で苦勞するとは。よくわたしは身の上に。かなつた噂でございますよ清介「モシ小こゑでうたより。それよ邪見なことでかり」モシ旦那。小三さんの心ヲ

このうたの文句が通てでざりますよねへ小三さん一ツ呼
氣がつけ給もうてへもんでござりますすよ　小三「なんだねれ
かしくもない娘子供ぢやアなるまいし心意氣なんぞはいや
だはね佐介「そんな事をねいひなさらずと。ちよつと一ツれ
やんなせへ、レそいつどいふ〳〵なだべこ。ちやら〳〵。
どんぶり鉢アういふ〳〵　金「アヽやかましい何をいふれだ
佐介「ハアヽ〳〵小三さんサア一ツといはせて小三はせんかたなくへ
ぎの間よわる三うたなまじな中はれたがからみはれ
味せん手にとり
苦勞もせないもの前　ハ〳〵如だ〳〵〳〵〳〵　小三「モウ是ぢ

かんにんしてれくし。平「コウおつなものでの。おきも實は上がたぜへろくだが。都といへば聞えがいゝが。上がた猿といはれこは一句もねへのす　佐介「その上がよもめへさんのやうな通人がありやすから東ツ子ゝ一句も出ません。体は旦那がわりいのさ。むめへさんがまり程がいゝかふ。やぼなら斯したうき目をせまいと。小三さんがこれ〳〵で。氣がもめるでござせへませうト　ひたいにつまね　金「そんなくぜつはむかしし事よ。コウそれよりやアすま　のゝはへる清公今の岡多氣の物語の二番目狂言をはなさねへか。後學のさめよ聞てへのふ清「ナニもう跡はとなしますべへ　金郎「なぜ清「小三さんにしろらもしろいはなしかへ清「なアよわつちが色れ戀はなしさトいふところへ「清介どん佐介どんお客があるよア佐介「ヲイく先川の小女「清介どん佐介どんお客があるよア　金「小三そこにある紙入そいつは所してはねられねへ　金「小三そこにある紙入を清公にやつてくんな。そして此一ツ提は。佐介貴公に譲つてやらうト　ふたりに　兩人「へイ是は有がたふござります。提てやるいたゞきいて出て行　金「ア、酔たゝながら　小三「お竹やもうこゝ酔たト　そのまゝそこへうちふしてせんごもしらは大いびき

かたづけておくれよ　下女「ハイ〳〵もうよろしうございます。
すかへ　小三「アゝいゝのさ。乳母や今夜は若旦那は。
つばどあがつたかへ「いゝへ。そんあにおすごしあそばせ
したやうすでもございませんが。いつたい御酒がおよわい
から小三「さうせんたいあがりはなさらんだが。ちかごろ
はよくあがるようば「さやうでございます。若旦那さまも
宿では。万事おぼーめすやうにもいかず。お心づかひもあそ
ばしますから。つつとつゝ御酒をあがらずは。お氣のはれや
うがございますまい。ほんにお坊さんもよくおよつたから。

若旦那のお床をのべませうか　小三「そんならそれ子をわた
しが抱て居やうから。お床をとつて上げておくれ。ト金之助
をいだきあぐるよそ。乳母はあの内六疊の座しきへ床をと
り夜着を出ーてうば「モシ若旦那さまへ。サアおよりまし
もりおは　金ーアイ〳〵。アゝいゝ心もちだぞト　たちあがり
されて　て上着をぬ
ぎし
下着ばかりよなりて床へ　金ーサアねつかアも寐ねへか坊
主とふをがだいて寐ようう小三「あなたが抱てれよつたら。そ
をこそつぶしてれしまこひなさるだろう　金五郎ーいゝはな。へ
ぶーてもおをの子だから。だきも何ともいひ人はねへ。万一

おをかつぶしたら。又いゝのをおしらへるはト　金の介の手をとり引けるゝ小三「すきな事をおつしやるよ。アレおよしなさい。そゝなに引はるゝと目をさまします。起しちやアわるうございますゝ金「ナニ起しやアへちよつと貸てくれトむりに金の助をだきとりてエ、よく寝坊主だぞ。コレちつと目をさまして御すばねへか。どちよ〳〵〳〵トくすぐりそ　小三「アレねよーなさいといふのに。寝るさへ立て起ちやアいけません　金「よ〳〵そんなら乳母の処へ行て寝乃。今目をさまして泣出すト。ふつかアの何のか邪广になるさうだトねさまへうその手

へわたせば　乳母は金を助をかき抱きて。次の間へ入りてうち臥しける

假名文章娘節用後編下之巻

曲山人 補綴

江戸

第六回

小三は乳母や下女と臥ー㒵。行燈の側につくねんとひとり何やら物案じの顔うちながめ金五郎「コウ小三何をそてるのだ。なぜ寝ねへ。又持病でもおこつたかトとはれて小三はほつといきなり「イヽエ持病ではありませんが。つく〳〵おもひまは出ますとあなたの事が苦労になつて金五郎「なぜおれがどふしたと。小三「もとより御好でなかつた御酒を。此頃のやうにあがり

ますかふ。しみ〴〵それがわたくしい 金五郎 フサわかつた
おをがあんまり。酒を呑だり身もちがわるいから。行すゑこ
しかたを思ひまいすと。つまふねへものだと愛相がつきて
そをが苦労になるのだらう。ウヽ、そうだらう〳〵。いやよな
つたらいやだといへ。おれも男だされてやるは小三ソレそ
んな無理をおつしやるかふ。それが苦労で片腹も。氣のやす
む間はござりません。大かたお宿のお雪さんよもやつぱり
御無理をおつしやりませうが。それでもあるふござります
金 なんの事だおかしくもねへ。そんなつまらぬ〳〵事と案ぢ
ずとサアもふ無用へか無用ながいヽト手土のばして 小三ア
レまだ着もれも着かへずせんよ金 いヽはな。着ものはそこ
でも大事ねへトいつヽ帯をとけた。下着のまヽに帯とんで顔み
ぎ。小三の
金 コレ小三そなたもかねて知る通り。心にそまぬお雪の事。
とやかく内でいふゆゑよ。のつぴきならぬ義理づくで。そぶ
〳〵請はうけたれど。松に櫻は見かへられずそなたにまさ
つた花がなからふか。かならずそれを苦にしねへがいヽ。ー
かし親を捨雨刀を捨て。矢立をさして町人になふふとおも

へだ。一も二もねへ心やすひ世界だのふ小三「サアそれがいやさよ苦労になりまする。只あなたが全ふに。れ宿のお首尾のよいやうよ。お雪さんとも お中よく。みなさまに御安堵させて。わたくしとも見すてゝさへくだされねばどのやうなせつないくらーを去ても。少ーもいとひは。いたしませんト しんじつ見へし女のみさほは金五郎もおもひやりてたもるよ。抵掲はさて。内へ入れてとおもふけれど何をいつても養子ぜかなしさ。むかしれ身ならいさくさなーに。おつけへはれて夫婦だがかへつて今の身の上が。思ひまはせばつまらねへトりかへせしがくアゝおきとーた事がつい胸におもつてゐるもの。女のやうなぐちばつかり儘になるのもならぬのもみんな約束しかたがねへ。こゝも浮よだどふなるものか。のふ小三。床へ這入て又いゝ夢でも結ふト ぐつとひと ついかなる事や契るらん。在斯程よ。隠居白翁は金五郎が日よまし放蕩つのりて。家にとては居らざるゆゑ義父文次郎はじめ家内のものよ。一ばい氣がねをしたりーが。お雪もはや十五にもなりたをとめ金五郎と婚姻をむすんには。すこしは足も止ふんと。頻に是をすゝめしかば。金五郎は心

ならずも。婚礼はしつれども。お雪さまだ年もゆかず殊に手のなきおぼこ氣なれど。とにかくおもしろからぬゆゑ。さまざまおしらへだましては。小三がもとへのみ通ふものから。はやくも二とせばかり立どもの猶不身持の止ざりけり。隠居白翁は是を愁ひ。文次郎夫婦もお雪の仕かたの。あしきもゑよ。金五郎が。内に居つかぬと口にいへど。心には真實おが子の可愛さに。金五郎に愛相やつきさん。我ゐるうちは善悪とも金五郎の爲をおもへども。いかはどもなく吾隠ひ。はてに後やいかならんと。老の心をいためつゝ。おもひなやみて手をまはし。小さんの名所聞たゞし。こゝろの中をさぐりしうへ。理を説て縁切らせ。事よ寄ば金を出し。支度をしていづかたへなりとも。片付やらんと思案しつ。金五郎が當番にて。詰所へ出て留守の日よ。小三がもとへぞ尋ねもきぬ。頃も文月上旬。小さんはとて赤中形の。ゆかたに藤色のうらろかけ。黒繻子の帯しどけなく。あらひ髪をうーろへさけ。様側へ出て金の介の腹がけを縫て居たりける。折から表へつゝ立出れば隠「卒爾ながら小三どのゝ紀宿は。爰でござ

りますかな小三「ハイその小さんはわさくしでございますが。あなたはついよ見なれぬ顔かた。どちらから御出なさましたお白翁「ハアそんなたさまが小三どのか。わしはおなさまにちと内々咄しがあつてわざ〳〵來ました。もるさつしやれと上へ通れ小三「何はともあれそこは端ふがしながらぢか。ヤア〳〵こちへ〳〵白「扨てなさまの名はかねてより。聞ては居をど逢ふはそじめて。わしは金五郎の祖父白翁といふものでござるが。今日わざ〳〵來ましたのも。外の事でもござらぬが。アノ孫の金五郎めが事。イヤもう見るかげもあいのやうな者を。よふヤア可愛がつてやつてくださる。眞身よとつてはうれしいともかたじけないとも。禮は詞に尽ませぬ。その深切なこゝろを見込で。ちとたのみたい事がござるト。聞より小三は胸に針。はつと心に當惑し。いかゞいませんと思ひ玄が。今さられどろく事にもあらず。かねての覺悟はさゝぞとおもひ。胸なでおろし氣をとり直し。茶烟草盆を出しつゝ　しとやかに手をつかへ小三「ほんにわさくしも若旦那さまのお咄ーよてつねり〳〵かふ。御噂さをうけ給はりましたあなたの事。お目にかゝり

ますはとじめてゝござりますれど。○ーんみ眞身の親よ訪れたこゝろ。
おうれしうござります。よふマアお出あそばしまーさと　いふ
かはつく〳〵　白翁　イヤなまりよくも參らぬて。アゝ物ご
打まもり
しといひ取まはし。容貌まで高位の。奥方とてもはづかしか
らぬ。人にすぐれた生れつき。いかなる人の身の果か。見を
ど見るほどうつくしい。アゝ若いものゝ迷ふはもつともか
い。こなさんを内へ入れたなふ。孫めが尻も落つくでならう
けれど。上へのさこゐ世間のむもはく。義理と人目の詮かた
なさ。たのみといふは茲の事。知つてるかいしらねとも。金

五郎はおしがためには。惣領むすこの一人孫。世が世である
なら。無理わがまゝも仕次第だが。だん〳〵深いやうすがな
つて。あれが親は家出なー。共弟が今での家督。それ養子と
なり去金五郎。おかの他人といふてはなけをど。養子と名れ
つくかなしさは。おもふよまかせぬ世間の人目。家の娘のお
雪といへるを。娶合せねばならぬもろ。金五郎もふせう〳〵
やうやくおれでろ婚禮してもろ。れ雪はまだ子供同然で。れも
しろくないから片時も。内に居つかぬはもつともかい。おし
が孫でいふではないが。世けん人には笑られて。それほど

の事わきまへぬやうな。氣性でもなかつたが。今に夜どまりいなはやます。女房ハはんのすもり同樣それは。誰もゐこなさんもゐ。わしが命のあるうちは。内外の者もわしよえんじて。金五郎がわるいとはいはねども。見ふるゝ通りわしも老人。今をもしをぬ身のうへもゐ。わがなき後は金五郎の身のためよ。ならぬともならうかと。案じ過せば夜の間も寢られず。苦勞で壽命もちゝまるやうじや。こんな事いふたら鬼とも蛇とも慈悲なさけのない心とはつきやらうが眞實あをがよくゝもなくば。内の娘のお雪の中に。子どもの一人も

出来るまで。遠ざかつてもらいたい。さすれば世間のかもはくもよし。又子どもでも出来てからは。こなさんを内へ入をても大事ない。今金五郎が義理あふ身でこなたを。内へよぶときは。部屋住の事も。衣世けんへすまず。こゝゝとつくり介賄して。しばしのうちを辛抱して思ひきつて見てくださを。もしそのうちが。待遠なふこなさんけど心にかなふやうな。身の爲によい處見さて。この爺が去たくしての縁付て進せませう。さうすりやこなたの身も落つきのれはくの人のさげ小氣づまなとるにも及をず。せめてはわしが禮心。氣樂にして進ぜたいト。ものやわらかのつひさならぬ義理づめけ。たにことをわけのみにいやといはれねだいつそわが身のなり行ふうち明んといふもひしが今さら素性を明しなば。見さげらをもし殊に又。金五郎の爲あーからんと。おもはさだめ小三「だんくのみうけたまはり。何と申さんやうもなく。大事のくく若旦那さまを。人よわるくいはせたり。あなたがたへいろくな。御苦勞をかけましたもみんなわたくしがいたづからつくつた罪でござります。おもるしなさしてくださいまし。それをマアにくいともねぼし先さず氣樂にさせて

やりたいと。かへつてやさしいそのおとど。もつたいないとも有がさいとも。やさしいやうはござりませぬ。去ながらわたく去は。たとへ外にどのやうなけつかうな處がござりませうとも。樂しみぞみはござりませぬ。只若旦那やみなさまの。おさめになります事なふど。たとへこがれて死すまでも。ふつつり思ひ切ませうといふもなうるみ聲わつとばかりみだれせきあげて。正体もなく泣ゐさる。こゝろせうちぞいかなふん。白翁もともによーヤレ〳〵ヤアよくれもひ切つてくださろこびなみだ一つた。かたじけないぞや小さんどの。このかなしさを見るがいやさに。今日行てたのまふか。明日行ていはふかと。一日〳〵と見合せてもぞふでいて出さねど果去がつかねど心を鬼にしてわざ〳〵來たが。さぞにくからうが是も身のためぞうさ世の義理の詮かさな老の身に後生は願はず。縁切りよ來た罪づくりわしが胸のせつなさも。すいりやうしてくださをよこの事とくと承知なら。けふなすといふでもないまゝろまかせにいつなりと。こなたの身よも怪我れないよう。手ぎをよくやつてくださをトいひつゝ立て出ながら。金五郎とは縁切つても。わしはやつぱり孫娘ぢやこゝろ。この後なんぞ不

自由ぶくだ。かならず〳〵遠慮なふ。なんなりとさういつて
よおしやれ。てなさんの身の落つくまでは。いつまでもわし
が貰ますモやト他人とおもはぬ白翁がてやさえきよ葉にうれしさ
あまりのかなしさやるせなきまゝに。とかくのいふへさへも
せず。只うつ臥て泣居たる。その戸根の不便さを。おもはや
りつゝ白翁も。老のなみだにかきくれしが。心よわくてかな
はじと思ひ直してかへりける。小さんもとよりお雪の事
と。聞てゐたもゐ来〳〵ぱ。中ゝ斷んは必定なり。もし縁
切らるゝ事とならだ。生てゐたとて甲斐なき身の。別をてう
らき日を送らんよりの。死して苦患をまぬかれんと。こゝに覺
悟をきめしもわせまき女子のこゝろから。嗚呼是非もなき
事におそ。かゝりしほどに乳母のお乳は。最前よりの一五一
十を。次の間にて聞ものから。小三の胸のせつなさを。さま
そとおもひやるほどよ。おのをもともに胸のうち。はりさく
むかりのくるしさを。おらへてゝのび泣ゐたるが。今はなか
〳〵おらへかねて。わつとむかりに走り出小三のそばへう
む「もしおなた。とんだ事ゐなりましたねへ。おのやうにゞ
アうつくおいそれとれ受合なすつたは。どふいふお心

か合點がまゐりませんおぼうさんのある事を。なぜうち明てかう〳〵だと。たつしやらぬのでござります。子までなしたる戀中と。お聞なすつたらお祖父さまも。無理に切をろとはおつしやるまいに。今若旦那と御縁を斷て。どうなさる思案めしてござります。お坊さんがかわゆくはござりませんか。あのお子さんと事はお案じなさふぬか。ヤアどふいふおこゝろ心でござりますト只〳〵とすぢに金大事とおもふのみ。心を付ることは異見乳母はかくおそのかほをなげんにそなたといふ通り。子までである身を關れる事。せつないともかなしいとも。胸の中はとりさくやうで。それくるしさは譬へられうか。それも名金ぼうのある事を。うち明やうとおもふたが。男の子は緣切らるゝとき男親に付がならひ。なま中な事いひ出て。あの子まで。こちらへ引とられては。若旦那も今までよりは。おほく〳〵御苦勞が增でござらうし。二ツよは又わたしもあの子を。手ばなしてはたのしみもなく。さぞ日にましさみしかふうと。みさんらしいがいひ出さぬも。やつぱりたがひの爲ぢかり。又若旦那と緣切つても。わたしや外よどのやうな。男が有うと二人とは。馴染をかさぬる氣

いないから。いつがいつまでもいまゐ通りに。斯してくらす心もそな。そなたもやつぱり今までとほりに。金坊の世話をしておくをよト。いふもあみだ乳母も目をおすりおがらうれば「まことよ阿なたれお心れ中を。推量いたせどいたすほどわたくしの胸もはりさくやう。なる程おぼうさんのある事をれかくしなすつたれ深いれ心。たとへ今日が日御縁がきれても。一生別れきりといふでいなー。ほんの人目や浮世の義理とれ祖父さまの先刻のおとむ。すこしの御辛抱でござりませう。又れぼうさんの事はおつしやるまでもなく。むゞア

くとお馴染なすつたものなんで他人とおもひませう。もつたいないがわたくしが。産ゆしたれ子だとぞんじますものだとへどのやうな苦労をいたした去ても。れ育てやす氣でござりますから。ちつともれ案じなさいますな。去かし是からわか旦那の。お手がきをさらおとなあなたは。いろ〳〵御苦労わそだふうと。それがおいたは去う。ござりますとほろりとれとさ先なみだ。小さんも浴衣の袖を目よ小三「わたしもすこんど今度の縁切りが。一生の身の大事だから。只何事も神まかせ。おるい工をしたのぢやアなし。天道さまも見どほしもる。今

日はけふ明日はなすと。その日は風に任するばかり。せつはつまつたそのときは。又外に思案もあらうから。それを案じてくんなさんな。今よも若旦那がお出なすつても。かならずわるい顔を云ないで今お祖父さんのお出なすつた事も。おしふ世申ちやアわるいようは「そきは呑まんでおりますが。なんぼ祖父さまのおたのみで。お家の爲や若旦那のおためとは申シながら。常にかはつてあなたの氣づよさ。れ思ひきりのよさといふものは。あんまり見事でござりますから。どふも合點がまゐりませぬト いはれて小三は。はつとうわく死する覺悟とさとられじとわざとまぎらすおどけ小三「アイタ〳〵〳〵。今のもやう〳〵で持病の癪が。どうやら頭痛もするやうなト まくらを取てよこになる 乳母はせんかたなく〳〵も次の間へ立て行て。金れ助のもかたびらを。縫ふも泪ではらどらし。小さんはしをし氣をやすめんと。よこよ寐ても眠られず。只胸さきのみとゞろきて。とやせんかくやとさまぐ〳〵。思ひなやみしをりかふに。隣する家にて若ものども。二三人にて聲高に。浮世ばなしのいろ〳〵なる。中に一人がいひけるは おらがむかふよねた。つとめ女の女を見たか ▲「フウ見

た〳〵。二十三四のいゝ女だつけ。ありがどふした文でもよこしたか ×「ばかァいひねへアノ女で此間大騒動があつたアな十「ハテノまた逃でもしたのか ×「どふして〳〵。逃ぐらゐならいゝけれど。首をくゝつて往生ーたアな十「エゝくゝつたか。ヤレ〳〵とんだ事をやらかしさの。そりやアマアどふいふ譯だ ×「聞ねへアノ女はの。婦多川の女郎だがのさる處の息子に惚てゝ〳〵ほれぬいて。たがひに心をかし合て。末は女夫だ夫婦よならうと。約束をしたが聞ねへ。その息子がれめへ内にやアの。いゝ嫁があるんだアな。そをなんでも深くかくして。まだ女房は持ねへから。請出す〳〵とだまかしさが。大ふでかしよ。それからふれめへ相應に。金がはりもいゝもんだがら。親父の金をひん盜んで。身受をしておれが長屋へ。連て來て圍つて置ての女房はたゝき出しの。から手よかへねへから。親父はれはおこりて。上がたへやるの。田舍へやるのと大もんちやくよ。した處があれ女は。女郎に似あぬよく出來さ者で嫁ゞ出されたり親父がおこつたのを聞と。サア氣ともんで〳〵。息子が不埒とはいふものゝ。嫁を出したり内がもめるも。みんなわたしがあやまり。

と。ひどく嫁に氣がねとして。生てゐちやア四方八方。丸るくいかねへと思ッたそうで。とう〳〵暇をーて。首をくゝつて死んでしまつたから。嫁も歸るー息子もそれから。しかたがねへかられとあしくなつたが。なんとその女郎はよつぽど氣めへもので胸がいゝに。第一貞女といふ女だ十一はんに女のかゞみだのふ水滸傳一百八人の中にどうかありそうな豪傑な女だの。なるほど女は魔のもので。外面似菩薩内心女夜叉とかなんとう。佛さまがいわしつた通り。顔はうつくしくつても肝魂のねそろしいのがあるものだ。しかしあれ女もその息子の。一旦恩になつたから男の爲や何かを思つて。死んだればわつぱれ名が殘るが。おしいかな首をくゝつさからられし先へだ。とても死ぬならいさぎよく。身を投るもちうだから剃刀で咽をぐつとやると鏡山の尾上ときてがうきにきいてゐるぜ×「さうよのふ。そこがやつぱり氣がよわいから。剃刀でやつたらいたからぶらとおもつて。くゝたのだらうが見つともなかつた十一「さうだらう〳〵。そもじやアやつぱりその息子の。面よごしてわらはを草だの。ほんよ死ぬのもよつぽどおんべろもれだ。なんにしてもおそろーや〳〵

ト。はなすを小三はきゝすまし「つく〳〵おもふひとりごと「ハテ世の中よも似た事があればあるもの今れはなー のやうすでは。この身に似たのも辻占か。なきもなかれもせぬ中を心におもはぬわいそづかしが。どうゞアなんといはれやう。死ぬる今期よ若旦那に。記腹をれたゝせ申ーては。後れ世までの心がゝり。ひとつ遣もおぼつかなし。アゝなんとせう故とせう。ト ひとりむねの 金の弁は蝉女れお竹と。 みくるーえけさきよ白翁が立歸るとき。いつかたへ行てゐそびゐたるが心にも小三や乳母か。なにやらなげくやうすもゐる。褒美さへも與だらずして。双門口に立出て土ほぜりして居るをりから。金五郎が來るを見て。よろこびて内 金の介「れつかアちやん。にかけこみやん。れどつちやんがた出だよ。れつかアちやん〳〵ト。出たりはいつたり 金五郎は入り來るゆゑ。小三は顔をしかめつするうちに 小三「お出なさゝ。起ぬがりて右れ手にてむなさきをさつくむさへながらいましト いつたむかりさしうつむいてとでなし 金五郎「どうしたおかしな顔つきだの氣色でもわるいれクトいつよかやさゑわらぬ 小三はいとゞ胸さきの。さけるばかりにさーあむ癪き詞よ。小三はいとゞ胸さきの。さけるばかりにさーあむ癪を。れさへても猶おさまらぬ。心一ッに白翁が。いひさる事

をいかよせん。なま中な事いひ出さば。たのまれしかひもなし。又金五郎に胸のうちをさとられ去とわざとな小三「けふ髪をあらひましたよ。まことよ頭痛がつよくして。ふさいでならぬよいろ〳〵な事を。考へますと心ぼそくて。それでついお顔いろもト せつなさかくし てわらひがは 金の介はさしれぬきて「おつかちやんもう氣色なほつたかエトいわれてなみだと 小三「アイもういゝよ金五郎「なんの氣色がわるさうなら。髪を洗はなけりやアいゝに金の介「おとつちやん。今ね。 余所よしよのおぢいしやん來て坊さまかつたよ 金五郎「ナニおぢいさんが來た。そりやどこのおぢいさんだとはれて小三はろくをそらさぬ顔で小三「ナニサなんでござりますよ。矢剣堀の御隠居さんが御出なすつたのでござりますがこの子は見るとこわがつてどふもなりません ヲホ〳〵トわらひに胸の中。さこそつらくもかなしかるべし金の介「おとつちやんお土産あるかへ 金五郎「ホイしまつた。ツイ今日はわすれて來た。そのかはりだゝアと行て。何ぞいゝものをとつて來な金の介「アイチヤツばゝア行ふやうト せたげるもへに次の間より立出る乳母も金の介といだき出てもくそぶりをつく〳〵

〻見てふ　金「なんだてん〳〵よおかしな顔として。どふも
去んがはおれにやア合點がいかねへ。なんぞ苦勞な事でも出來たか。
コレなぜおをはへだてるれだ。そりやアわからねへといふもれだぜ　小三「エ、なにも込入た事もござりませんから。
ほなたをばへだてゝ致ませんが。余うつ〳〵として居ましたから。つい色〳〵な事を案じ過して。互にこーかた行末を。
咄て果は泪をこぼしふさいてなりませぬからとろ〳〵と。
少氣を休めさのでござりますがわたくしよりはあなたれむ
顏。いつよないお色けわるさ。お心持でもお悪くはござりま
せぬか　金「ナアニおそのはこりやア持めへだから。時々ふさ
ぐが直になほるよト口よはいへど心にれ何くれ彼く　男氣の。
それとさまじ〳〵の苦勞あれども　なほ
ものぞかし　小三「なたたちつとれと氣ばらーよ。御酒でもおわ
ぐんなさいませんかエ　金「いやア〳〵酒よりはマアちつと寐
よう。全体けふは番だから。どうも來らをねへ處だつけが。
きのふもおとゝいも來ねへからは又案じるだらうと氣になつ
てそをでやう〳〵ぬけて來たのよ。一ト寐入やつたら直る
だらうト　小三のまくらを引よ「のふ小三。實に人のいつ生は

どうなるものかーきねへものだの。今でろ斯して暮さうとは。おらア夢よも氣ぐつかねへよ。末々かけて夫婦だと。互に思ひおもはれたに。お雪といふ惡魔が這入て。苦勞をさせるせつなさつらさ。夫も名にこそ祖父さんや兩親へ。いち倍氣がねをするといふも。アゝうるせへ世れ中だのふ。小三金其樣にマアお雪さんの事を。とやかくとおつしやるがお雪さんは。大事のくれ家のお娘でござりますから。かわいがつてあげてくださいまし。どうで私は日陰の身もの。どうなつてもよろしうござりますらう。そんなにあちこちお氣をつかつて。必煩てくださいますな。それが私は苦勞でくなりませんと。しばー泪よくれ六ツの。かねのなるまでまどろまんと。金五郎はおいにうち臥ける。是より小三金五郎にはいそつかしをいふや否やそは三べんを見て知り給ふべー

假名文章娘節用後編下之卷終

明治十五年十一月廿七日再版御届　定價十二錢

著者　故　曲山人

出版人　東京府平民　武田政吉　京橋區彌左衛門町十三番地

發兌　鶴聲社　神田裏神保町八番地

横山町　辻岡屋文助
日本橋通二丁目　丸屋鉄次郎
神田雉子町　巖々堂
同小川町　秩山堂
飯田町　武田平治

通り油町　藤岡屋慶治郎
人形町通り　法木徳兵衛
馬喰町二丁目　山口屋藤兵衛
木挽町一丁目　萬字堂
芝三嶋町　和泉屋市兵衛

娘節用

東京圖書館

和書門	小說類	函	三一架	四號	二十冊